

「何を云ふのや、久七、長い間妾が斯うやつて煩らうて居るのがお前には分らんのかエ。實は……あの……お前に……」

こゝまでは云へますが、これから先は流石に云ひ悪いので、もじ／＼して居りましたが、

「あの久七、妾はお前に戀煩らひやがな……」

と久七の手をしつかりと握りました。久七も木竹やなし、

「へエ……嬢やん、それは眞實で御座りますか」

「なんの嘘をつかないな、女の口から羞恥かしい推量して呉れたが宜いわいな……」

「へイ有難う御座ります。そう云ふ事なら御主人様には申譯が御座りませぬが、人の噂も七十五日と申しますで、噂が覺たら何とかまたお詫をする時節も参りましよ……サア人目に掛らぬ其中に、チツトモ早うお仕度を」

「そんなら妾の云ふ事を聞いておくれかエ」

「嬢やん」

「久七」

と互が寄添いますと、今まで互へて居りました月に雲がかゝつて暗となりました。芝居なら此所が木頭で舞臺が廻りますと舞臺一面櫻の釣枝、上手に紅白の幕、山臺にずらりと囃子方が並ぶ。花道からバ

タ／＼でお花が出て来る。石に躓蹙づくとその所へ跪づく。久七が走つて来るお花に突當る。入れ替つてお花ぢやないか、久七さんと云ふと、三味線がシャラン唄が落人のと語る所ですが、落語の方はそんなものは御座りません。話が變りまして、京都の紺田屋忠兵衛さんは、可愛い娘さんに死に別れて商賣も手につきませんので、店の番頭から若い者丁稚に至るまで、其れぞれお金を遣りまして暇を出しました。家財家財を全部御親類へ預けまして、御夫婦は娘の菩提を吊ふ爲に四國西國の靈地を巡禮に出まして、今は秩父阪東を思ひたち巡禮をしようと廻國致しまして終りに江戸の淺草の観音さんへ参詣しようと、毎日晝は市内を廻り夜は木賃宿に泊つて、若い年頃の娘さんを見ると老の愚痴、

「ナア婆さん、今日芝と云ふ所で見た娘さん、丁度お花と同じ様な年頃やな……」

「ほんに然うどすな、お花が今頃生きて居て呉れたら、こんな巡禮なんぞはせいでも、面白おかしう江戸見物が出来るのに、あのお爺いさん貴君もう泣いてなさるのかへ」

「いや私は泣いてるのんやない、江戸は暑いので眼から汗が出るのんや、サア今夜は寝てまた明日は淺草の方へ行こう、もう早う寝なされ」

と煎餅蒲團に巻かれて寝ましたが、翌日は早朝から淺草方面へ詠歌を唱へながら遣つて参りました、淺草の観音さんへ参詣を致しまして、雷門を抜けて、並木通りへ出て参りましたが、紺田屋といふ店先で、